

## 子育ては自分育て

上うえ 廣ひろ 榮えい 治じ

時代とともに食卓の風景も変わってきましたが、それよりも変わったのは「弁当」の中身かもしれない。私が子どもの頃のお弁当といえば、四角いアルミの弁当箱に白いご飯を詰め込んで、真ん中に赤い梅干しを一つ押し込んだ、文字通り「日の丸弁当」でした。隅に沢庵が二、三切れ入っていました。

やがて弁当箱に仕切りができて、しょっぱい塩鮭や煮豆などが入るようになりました。玉子焼きが加わったのは、少しあとのことだったように思います。

そんな世代にとっては、最近のお弁当の豪華さには驚かされます。とくに、おかげでアニメのキャラクターなどをかたどった「キャラ弁（キャラクター弁当）」なるものは、まるで玩具箱おもちゃばこのようです。いったいどこから箸をつけたらいいのでしょうか。

昨年から、一風変わった「キャラ弁」の本が話題になっていると、反抗期の孫をもつ会友さんを見せてくれました。タイトルは『今日も嫌がらせ弁当 反抗期ムスメに向けたキャラ弁ママの逆襲』です。

八丈島に住むシングルマザーが、反抗期にさしかかって口をきかなくなった娘と、なんとかコミュニケーションがとれないものかと考えた末に、ある突飛な方法を思いつきます。それが毎朝の「キャラ弁作

り」です。朝はまだ暗いうちに起きて、手間暇かけた弁当を、娘が高校を卒業するまでの三年間作り続けたいと思いますから、その執念はハンパではありません。

何よりその中身が傑作です。栄養のバランスのよさはいうまでもなく、その造形のクオリティーの高さとユーモアのセンスがすばらしい。娘さんから「学校まで車で送ってほしい」と言われれば、歩く人の姿をウインナーとゆで卵で作って、かたわらに「歩け!!」の文字。文字はもっぱら海苔とチーズを使っています。使用済みの弁当箱を出さなかったときには「弁当箱だせヨ!!」。母の日が近づけば、カーネーションの絵とともに「随時受付中」の文字。試験が近づけば「テスト前日」と気合を入れます。

高校二年生の春、思いがけないことが起こりました。反抗期に入ってから、母の誕生日にも「おめでとう」さえ言わなくなっていた娘がカードをくれたのです。ピンクのカードには「なんさいだかしらないけどね。若い頃とちがって体も動かないんだから、あんたも気をつけなさいよ」というメッセージが書かれていました。そしてプレゼントはフライパンでした。毎日の弁当作りでフライパンがいたんできたことに娘も気づいていたのです。

卒業までの最後の一週間は、親として言いたいことをストレートに書きました。「すべてが思い通りになると思うな!」「無駄と思うことも本気でやれ!」「夢を叶えろ!」

そして弁当作りの最終日、母は娘に二段重ねの大きなお弁当を渡します。その一段目は、「あなたは嫌がらせのお弁当を残さず三年間食べ続けました。その忍耐を称えここに表彰します」と書かれた表彰状になっていました。

これに対する娘の答辞は何もありませんでした。しかし、出版された本には、「キャラ弁ママ」に対す

る「反抗期ムスメ」の文章が載っています。そこには、変なことばかりして笑わせる母親を「うざい」と思いつつも、夜遅くまで働いているのに朝早くから台所でカチャカチャお弁当を作ってくれたことに感動し、心の底から尊敬しているようすが正直に語られています。

精神科医の斎藤環さいとうたまきさんは「朝日新聞」の書評欄でこの本に触れ、「難しい母娘関係を乗り越える」ためのヒントがここにはあるとして、次のように述べています。

——「あなたのため」と称してなされる「おせっかい」よりも、愛情を込めて続けられる「嫌がらせ」のほうが「健全」なのはなぜか？ そこにあるのが「支配」ではなく「交渉」だからではないか？——  
「支配」などという強い言葉を聞くと、自分とは無関係の他人事のように感じられるかもしれません。しかし、実際には、多くの家庭で子どもに対するさまざま形の支配が行われていて、それこそが親子関係を歪ゆがめる最大の原因になっているのです。

最もあからさまな支配の形は、しつけや教育に名を借りた肉体的な暴力や精神的な暴力です。

「親の言うことを聞けない子は、うちの子ではない」とか、「お前みたいな子を産んだつもりはない」などと子どもを責めたてるのは、立派に暴力的な「支配」です。

一方、目に見えにくい「支配」の形もあります。それは、子どもに対する過保護や過干渉です。「自分の思い通りに育てたい」と思うあまり、あれをしろ、これをしろと押しついたり、あれもだめ、これもだめと口やかましく禁じたりしてしまう。斎藤環さんが言う「あなたのため」と称してなされる「おせっかい」です。「おせっかい」といえば、猫かわいがりして何でも親がやってやったり、買い与えたりする過保護も過干渉の一種とっていいでしょう。

たしかに、お弁当の嫌がらせは、直接的な「支配」ではありません。娘に面と向かってお説教はしていないのですから。でも、何とか思いは伝えたい。その思いを託したのがお弁当だったのです。

作戦はまんまと成功し、娘は「うざい」と思いながらも、母親の小言も美味しく食べてしまいます。「うざい」けれども、親がいつも自分に関心を寄せ、見守っていることと、そのために費やされている努力だけは、十二分に伝わっています。お弁当を介することで親子の距離感はほどよくなっていたのかもしれない。

子育てのなかで最大の難所が反抗期だとよくいわれます。しかし、反抗期とは、これまで何でも親に頼っていた子どもが親離れして自立していく誰でも通る道筋です。あわてず騒がず「大肯定」して受け止めればよいのです。子どもが急に「反抗的」になってきたからといって、叱ったり詮索したり、正論を押しつけることはやめましょう。「あたたかく見守るが、干渉はしない」という「捨て育て」の毅然としたスタンスが、この時期ほど必要なときはないのです。

干渉しないといっても、「お早う」「行ってらっしゃい」「お帰り」「ありがとう」「それはすごい」「よかったね」などという、挨拶や声かけだけは忘れずに。また、子どもが話したそうなるそぶりを見せたら、しっかりと向き合って徹底的に付き合ひましょう。そして何よりも、倫理を実践するあなたの背中こそが、子どもを健全に育てる要だかなめということを肝に銘じておきましょう。

「嫌がらせ弁当」の本を見せてくれた会友さんはご自分の長い子育ての経験を振り返って、しみじみと言っていました。「育児って、ほんとうは自分を育てる。育自よくじなんだと、気づかされました」と。子育ては自分との真剣勝負でもあるのです。